



令和3年度

鹿児島県の教育

8月号

巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会高等学校部会副部長

鹿児島中央高等学校長
大脇俊朗

「原点を見つめる」

本年から高大接続改革の一つとして、自分が得た知識・技能を活用する力、表現する力を問う、新たな大学入学共通テストが実施された。英語の外部検定試験の活用や、国語・数学の記述式問題の導入の見送りなど、実施までの紆余曲折はあったが、大きな改革の一步が踏み出された。一方、昨年来の新型コロナウイルス感染症は未だ収束が見通せない状況にあり、学校の教育活動も様々な制約を受けながらも、生徒の学びの継続を第一に、知恵を絞りながら教育活動を展開している現状にある。

AI等の先端技術が発達したSociety 5.0の時代では、変化の予測が難しく、社会の在り方が劇的に変化していくとされている。そのような激動の時代において必要とされる力は、自らの言葉で問いを発する力や、多様な他者と協働して課題解決に向かう力であるとされている。

単なる知識の暗記にとどまらず、答えにたどり着くまでの過程において、自ら主体的に考え、他者と議論するという深い学びを重ねることが大切である。自らの頭で思考し判断する力や、周囲と力を合わせて課題解決に向

けて取り組む対話力が求められているのである。さて、教育の質的転換が求められている現在の状況の中で、自分はなぜ教職を志したのだろうと思っておこす。国語科を指導する中で、人の喜び、悲しみ、痛みを感じる心、感性・想像力を育てたい、自分の頭で考えて表現・行動することの楽しさに気づかせたいと思っていた。そして、生徒が自己を確立しつつ人生を切り拓いていく時に立ち会えることに大きな喜びを感じた。初任校以来、三十年ぶりに勤務することになった本校で、自分の教員としての原点を思い起こし、学校経営に取り組もうと考えている。

高等学校においても、時代の要請に応えるべく、「社会に開かれた教育課程」を展開していくかなければならない。チョーク&トークの一斉授業からの脱却を図り、学力の三つの要素「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力」をバランスよく育み、主体的に学び、持続可能な社会を担っていく力を備えた生徒を育成していかなければならない。

先人が築き、学校に受け継がれる精神性、誇りを基盤としながら、さまざまな可能性に挑戦する勇気をもって、自らの運命を切り拓いていく生徒たちの後押しをしていきたい。

令和3(2021)年8月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有)アクト印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		



「風樹の嘆」

沈壽官 陶芸家 十五代 沈壽官

略 歴

一九八三年 早稲田大学 卒業
 一九九九年一月十五日 十五代 沈壽官を襲名
 二〇一一年 大韓民国全羅北道南原市名誉市民に推戴される
 二〇一三年 大韓民国慶尚北道青松郡名誉郡民に推戴される
 二〇一五年 鹿児島陶芸家協会会長 就任
 二〇二一年 文化庁長官感謝状を賜る
 二〇二一年 駐鹿児島大韓民国名誉総領事館に任命される

「教育」と聞いて、頭に浮かぶのは亡き父、十四代沈壽官である。私が未だほんの幼かった頃、父は当時の小学校の複式学級の有り様に大変不満だったようだ。

親が田舎に暮らしている。それだけの理由で子どもは教育を受ける権利が制限される。このことは「教育の機会均等」に反するのではないか？ということだったらしい。

そこで、弱小美山小学校PTAは「谷間の子どもを救う会」という会を結成し、「谷間で働く家族の子どもたちを教育の谷間から救おう！」と鹿児島県全土の山間僻地の全ての小規模校に呼びかけた。従来の二学年合わせて二十五人の基準を十五人に引き下げようという提案であった。

即座に賛同の狼煙を上げたのが、屋久島の小杉谷分校PTAであったという。営林署の職員の子弟が多く、教育熱が高かったのである。この運動は海を越えて県下全域の小規模校PTAに燎原の炎のように拡大していった。

県議会に対する署名活動、請願、陳情、果ては県庁での座り込みまで行い、ついに鹿児島県はその要請に日本で初めて応じることとなった。

た。

議会、行政側にとしてみると、教職員を大幅に増員しなければならず、予算的に苦しい決断であっただろうと容易に想像できる。何れにせよ、「谷間の子どもを救う会」はその使命を果たした。

当時、我が家の父の部屋には自筆で「未来は子どもと共にやってくる」と大きく記されていた。日本が戦時中にアメリカと戦う中で、もう片方で受けた「朝鮮人差別」という別の戦い。子どもの世界でも「朝鮮征伐」という言葉の下の待ち伏せ。一度逃げれば二度と学校に辿り着けない。その中で、彼が出した唯一の答えは、とにかく強くなること。そして見事に戦死して、軍神として靖国に祀られること、そのみが我が家の名誉を守り、妹たちを差別やいじめから守る道であった。

民度を上げなければ、差別や言われなき偏見は無くならない。そのためには、社会教育が大変重要である。彼が少年期に身をもって知った現実から得た持論であった。

中津藩の哲学者であった三浦梅園の言葉を引用したい。

「二酌の水を海に入れたり。

海の水増えたりというは愚かなり。されど、増えざるといふは偽りなり」

つまり、大切なことは、一酌の水を海に入れた行動そのものなのだ。まさに行動哲学である。

父は私に一人前の大人になれ、と常に言った。私は、それは職業から得たお金で家族を養うことですか？と尋ねると、それだけでは充分ではないと言った。家族を養う、その上で、一人で居ても寂しくない人であれ、と言われた。

正しいと信じたことは、たった一人きりでも貫かなければならないという意味だ。

感情の量の多い人だった。私が追い詰められた時には、涙が出るほど優しい反面、つまらぬことをすると、猛虎の様な眼光で幾度も射すくめられ、時には鼻血が止まらぬほど叩かれたこともある。故に随分と私もその狭間に悩まされた。

しかし、父の死後、韓国の父の親友、李大淳先生に平然と言われた。

「君を強くするためのだよ」と。
 男親の愛情とは、かくも妻まじいものか…。
 今はまさに「風樹の嘆」である。



G I G A スクール構想の

スタートにあたって

尾崎小(北) 小山 俊 明

一 はじめに

令和元年度末に鹿児島市で行われた「かごしま『教育の情報化』フォーラム」に出席した際、G I G A スクール構想についての説明を聞いた。「令和五年度から一人に一台ずつタブレット端末が配布され、高速ネットワーク回線が整備される。」その時は、この短期間で整備できるのだろうかと半信半疑だった。しかし、実際はコロナ禍の「学びの保障」という観点も加わり、計画は二年前倒しとなった。本年度、何から着手するのが正解なのか分からない状態でのスタートではあるが、本校なりに実践している取組を基に提言させていただきたい。

二 校内研修での取組

最初に取り組んだのは、「そもそもG I G A スクール構想とはなんぞや。」ということだった。文部科学省や県総合教育センター等から発行された資料を基に、教職員がその目的やよさについて知ることで取組が進むと考えたからである。この研修により、G I G A スクール構想の概要と必要性について共通理解を図ることができた。

次に、教育用クラウドサービスを使用する

ためのユーザーアカウントについて学んだ。県内の公立学校に在籍する間は、ずっと使えるアカウントが全児童に配布されるため、その重要性を職員間でしっかりと共通理解しておく必要があったからだ。

そして、その後はロイノートやGoogle、Microsoft等の授業支援アプリを実際に体験しながら研修を進めている。説明を聞くだけで理解することはなかなか難しいが、「習うより慣れよ」の言葉どおり、実際に端末に触れながら操作していく方が研修としては、より効果的だと感じた。

これらを通して、職員は授業での具体的な活用法についてイメージできるようになってきた。

三 日曜参観での取組

日曜参観で「親子G I G A スクール教室」を実施した。県内の公立高校卒業まで使うことが可能なアカウントを配布する際には、児童だけでなく、保護者とも共通理解を図る必要があると考えたからである。

また、端末を活用してどのような学習が展開できるのかも模擬体験してもらった。一台の端末に身体を寄せ合い、親子でのぞき込み

ながら、ログイン作業に四苦八苦する姿は、見ていてとても微笑ましかった。操作に慣れた後は、みんな協力して、Google スライドでプレゼンを作る活動に挑戦した。タブレットのカメラでお気に入りの場所を撮影したり、キーボードを使ってコメントを入力したりしていく子どもたちの生き生きとした姿を見て、保護者も感心した様子だった。今後は、授業参観等でも端末の利用が増えると思うが、親子で学ぶ機会を設定することもぜひお勧めしたい。

四 おわりに

G I G A スクール構想を推進することは、「全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現(第十期中教審答申資料より)」につながっていくものと考ええる。

タブレット端末には、様々な機能が備わっており、それらを子どもたちが、どのように学習で活用していくかが大切である。そのためには、文房具のように必要に応じていつでも自由に使える学校としてのルールや環境づくりが必要である。

しかし、個別に端末を活用するだけではG I G A スクール構想の目的は達成できない。そこで得られた個の学びを仲間と共有し、考えをつなげることでより深い学びになっていくものと考ええる。

まだまだ、本校は試行錯誤の段階だが、先進校の取組等を参考にしながら、失敗を恐れず積極的に取り組んでいきたい。



後継者育成をリレーする

栗野中(始) 富田好昭

一 はじめに

令和二年四月、初めての校長職として着任し、本校教育活動を進めてきた。学校を預かる者として「後継者育成」を中心に据え、教育活動を展開してきた。それは、これからの社会を担う人材を育てるということであり、そしてまた、更にその先の世代の後継者育成に従事する教職員の育成であると捉えている。

新たな時代の教育に向けて変化することを求められているが、これまでの教育のよさを大切にしながら変化を遂げることを大切にしていきたいと考えている。

二 取組例提案

(一) 活動の価値付け(生徒へ)

本校でも教育課程に沿った教育活動を展開しているが、その活動のもつ意味を真に理解できているのか気にかかる。例えば、本校キャッチフレーズの一つに「心のこもった挨拶が溢れる学校」を掲げ、生徒会と共に取組を行っている。校内での挨拶運動に一生懸命に取り組んでいるが、挨拶が地域の方々との潤滑剤であり、そして、また新たな社会での人間関係を築くものであ

るということに繋がっていないのではないかと。

豊かな地域社会、新たな関係性を築いていくために必要な力として、挨拶の力が必要であること、その訓練として校内での挨拶という具体的な活動があり、できなければ指導するということを理解させ、取り組ませたい。

学校で行う活動は、将来、社会で役立つ力を育成するということである。このことを指導するに当たっては、当然教師も社会の一員であり、あらゆる場面で挨拶ができるということが必要である。

(二) 活動の価値付け(職員へ)

今回の感染症対策は、これまでの学校の取組を見直す絶好の機会であった。学校内外の多くの行事が簡素化、短縮化された。

本校の取組においても感染拡大を防ぐために、周囲の学校の状況を把握しながら中止や短縮を行ってきた。ところが、新たな取組を始めようとした際に「業務改善が言われている中で取組を増やしていいのかわ」や「人は集めない方がよい」という言葉が頻繁に出てくるようになってきた。感染症

三

職員のプライドに火をつける

人事評価面談を通して、職員が理想とする授業像や大切にしている教育について確認し、これらの取組を充実させることを通して、校長が掲げる具体的な生徒像の実現に寄与する教育活動を展開させるようにしている。

教育に対して真剣に向き合ってきた職員に対して初心を思い出させることで、学校経営に自ら参画しようとする意識をもたせている。教員としてのプライドにもう一度火をつけることができれば、管理職以上に生徒の近くで教育活動を展開している職員なので、よりよい教育活動を生み出してくれるはずである。

四

おわりに

教育の目的は時代を担う人材を育成することである。現在の状況で育った生徒たちが、「コロナ世代」だからと言われることのないようにどのような人材を育成するのか、これからの社会に必要な資質・能力を明らかにして、教育活動を展開すべき時である。また、職員にしてみれば、次世代の学校経営を担うべく人材を育成することが、我々管理職の務めである。これまで、諸先輩方から学んできたことを生かして、これからの人材を育成していかなければならない。



学校教育目標実現を目指して

中郡小(市) 田 淵 修

一 はじめに

本校は、児童数三百七十三人の中規模校である。学校教育目標「命を大切にし、よりよい自分を目指してがんばりぬく子どもを育てる」を実現するために、三十五人の職員が一丸となって取り組んでいる。

二 命を大切に

学校教育目標の出だしがこれである。着任したときは、過去に何かの事故があり、それを教訓に定めたものだろうと考えた。しかし、元PTA会長のNさんに尋ねてみると、「ある時、正門前の路面電車の軌道敷を横断される御老人がいらつしゃった。それを見た子どもたちが『とても危ない。交通事故で大切な命が失われないようにしよう。』と話し合い、交通安全宣言をした。昭和六十三年のことである。」とのこと。平成十二年には交通少年団も結成され、「交通安全の手紙」渡し等を行い、交通安全に対する意識を高めている。

三 よりよい自分を目指して

校訓は「明るく元気に」「清く素直に」「理想を目指して」である。全校朝会では、総務委員会の代表の合図で皆が暗唱する。子どもたちは全般に明るい。登校すると、多くの子

どもが校庭に出て、鬼ごっこをしたり、縄跳びをしたりして楽しんでいる。校門では、語先後礼の挨拶を勧めている。ほとんどの子どもが立ち止まって手を体にかけて挨拶をする。門礼を実践している子どもも多い。学校の近隣に鹿児島大学、市立図書館、科学館等があり、教育的環境に恵まれている。子どもたちの学習意欲は高く、皆目標を持って取り組んでいる。

四 がんばりぬく

昨年の市小学校陸上記録会では、百メートル走・走り幅跳び・四百メートルリレーで一位となった。運動神経のよい数人がいたことも事実だが、皆がよく運動に親しんでいる。長縄を使った連続跳び、短縄での検定等を継続して行っている。また、昨年の読書冊数は平均百七十一冊である。よく学び、よく運動し、よく本も読む文武両道を実践しつつある。

五 美しく

これまで本校の「一校一改革(子どもにとつての努力点)」は「揃える」であった。これは、よく浸透し、靴箱の靴は概ね揃っていた。そこで、本年度は「美しく」に変えた。重点を玄関・水道・トイレとし「まず使った人がき

れいにしましょう。」と呼びかけている。靴の砂が落ちていなかったり、トイレのスリッパが乱れていたりすることがある。また、水道の掃除が十分でないこともあるので、これから粘り強く取り組んでいきたい。本当は、窓をピカピカにしたいが、落下事故等があってはいけないので、推奨していない。校長が手の届くところを磨いて回っている。もう千枚磨いた。長年磨いてない窓は雑巾が真っ黒になる。やってみて気づかされる光景だ。

六 子どもと遊ぶ

昼休みの後半は校庭に出る。すると、「校長先生、遊ぼう。」と声がかかる。種目は決まって鬼ごっこ。一年生と遊ぶことがあれば六年生と遊ぶこともある。一・二・三・六年生が混ざって遊ぶこともある。誰でも大歓迎だ。鬼ごっこの途中に、子どもたちの人間関係が見えてくる。気になったときは声をかけたり、担任に相談したりする。職員は時間を工夫して子どもと触れ合っている。「一枚のプリントは大事ですが、一回の触れ合いはもっと大事ですよ。」これは私の口癖だ。

七 おわりに

新型コロナウイルス対策のために行事を中止したり、縮小したりした。そのたびにPTAや親父の会の皆さんの理解と協力を得ている。地域の皆さんとの連携は十分できていないので、新型コロナウイルスの問題が一段落したらすぐ連携できるように準備しておきたい。



松陽プライド〜9つの力〜

松陽高 田嶋 吾富

一 はじめに

本校は、上伊集院駅から徒歩十五分の鹿児島市福山町（旧松元町）に、十萬平方メートルの広大な敷地と恵まれた自然環境の中にある。昭和五十七年十一月創立、昭和五十八年に多様なコースをもった普通科高校として開校した。平成七年には、県内で唯一、音楽科・美術科が設置され、現在まで、本県高等学校芸術教育の拠点校としての役割を担い、県内はもとより全国からも関心を寄せられている学校で、今年で創立三十九周年を迎える。

これまでに一人を越える卒業生が巣立っており、県内、全国はもとより、世界各国の様々な分野で活躍する人材を輩出してきている。昨年度は特に、音楽科や美術科から東京藝術大学に過年度卒を含め六人が合格するなど全国からも注目を集める実績を上げていく。「向学・高雅・貢献」を校訓に掲げ、生徒一人一人の個性の伸長と豊かな感性の育成、そして創造性あふれる教育活動を展開している。

二 特色ある教育活動への取組

(一) 多様なコース制を生かした特色ある教育内容
普通科・音楽科・美術科の三学科があり、さらに普通科には、文科・理科・体育・書道・英語の五コースを導入し、それぞれの特徴を生かした教育課程を選択し、生徒一人一

人の個性の伸長を図っている。音楽科・美術科では、県内外で活躍されている著名な講師四十人を迎え指導の充実を図っている。各学科・コースの特色ある学校行事や教育活動として、松陽芸術祭、卒業演奏会、ヨーロッパ研修旅行、修学旅行、学科コース別の合宿セミナー、体育コース生のゴルフ実習、さらに体育祭の集団演技などがある。

(二) 高等学校学習指導研究の拠点校としての取組
県総合教育センターの研究提携校として、センターと連携しながら現在「生徒に身に付けさせたい資質・能力を教科等横断的に育成する研究―目標・指導・評価の一体化を実現する取組を通して―」という研究テーマに取り組んでいる。これまでの「アクティブラーニングの実践」をさらに、深め、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成を目指している。

(三) 観点別評価の導入
これまでの定期考査の「得点」に偏った評価から、観点別学習状況に基づく評価へと転換した。単元や題材ごとに観点別評価（A、B、C）を行い、これを基に各学期末において五段階評価で評定を付ける。これにより、生徒の資質・能力をバランスよく評価できるようになった。

三 カリキュラム・マネジメントの充実に向けて

「松陽プライド〜9つの力〜」の浸透と具現化
「社会に開かれた教育課程」の実現と学校教育目標達成のため、キャリア・ガイダンス部（進路指導部）や教務部、各教科からなる「カリマネ策定委員会」を設置し、本校生徒に身に付けさせたい資質・能力を校訓の「向学」「高雅」「貢献」をより具体化した「松陽プライド〜9つの力〜」に集約した。さらに、教務係が「学びのグランドデザイン」も作成し、各教科や「総合的探究の時間」、特別活動を通して育成を目指す資質・能力をこの9つの力と結び付けた。



四 おわりに

今後、変化の激しい時代において、高校教育の在り方もさらなる特色化・魅力化に向けた取組が求められていく。本校においても、「創造性豊かで実践力のある社会に有為な人材」を育てたい生徒像として掲げ、それぞれの学科の特性を生かした多彩にして魅力あふれる学校づくりをめざして「One for all, all for one」をスローガンに生徒、職員、さらに保護者、地域の方々にも加わっていただき、スクラムを組んで取り組んでいきたいと考えている。



子どもが授業で輝く構成的アクション

田崎小(隅) 黒江 真一郎

一 はじめに

本校は、鹿屋市街の南東部に位置し、近年住宅地の郊外への広がりにより、児童数が漸増している。現在、二十五学級、六百十七人の中規模校である。

学校経営における第一の重点を学力向上に据え、昨年度鹿屋市指定研究協力校として公開研究会を開催した。「子どもの変容につながる研究に！全員で！」を合言葉に授業改善に取り組む中で、子どもの「できた。分かった。」「友達に教えたい。学びたい。」に高まりや広がりが見られるようになりつつある

二 取組の実際

本校の特色の一つに、所属する人間の多様性が挙げられる。教員六百人を超える個性の存在、毎年替わる担任、クラスの友達。その中で学ぶ「生きる力」の価値は大きい。反面、関係性の状況が子どもの学びや育ちに与える影響も大きくなる。「子どもが授業で輝く」ためには、子どもとの人間関係に意図的、構成的にアプローチする必要がある。この共通認識をベースに、研究主題「『主体的・対話的で深い学び』を目指した算数科学習指導の工夫」の取組を進めた。

(一)

認め合い、学び合える学習集団づくり

ア 構成的グループエンカウンターの推進

朝の「ふれあいタイム」を中心にSGEを計画的、継続的に実施している。担任のねらいに即したエクササイズが提示されると、自己開示した触れ合いが生まれ、シェアリングで自覚化に至る。特に、学力向上アクションプランの一学期重点内容に位置付けて共通実践し、学級力の強化を図っている。

イ 対話的学びの工夫

個の学びや学習過程に応じて、互いの考えをつなぎ広げる対話の工夫に取り組んだ。

確認対話：「問い」の共有化、着眼点と方向性の確認等をして、安心・自信・

意欲を向上させる目的の対話

自由対話：自力解決後、フリーに席を立ち、答えの比較・確認(停滞児童へは支援)、見方・考え方の比較・交流をすすめる対話

全体対話：教員が論点を整理、焦点化しながら、統合的・発展的に考え合う対話

ウ 意図的な学習者単位の設定

必要に応じて子どもの座席やグループ編成を意図的に構成することで学びが活性化する。子どもの実態や人間関係の洞察から、より効果的な学び合いにつながるよう教師が仕組む。また、全ての子どもを学びを保障する。例えば、レディネスを強化する目的で行う導入時のスタートフラッシュを時々ペアで行わせる。一斉で見落としがちな「かくれ未理解者」を学びの土俵に上げるためである。

(二) 取組の成果及び課題

コロナ禍にあり学び合いに制限が生じる中でも、子どもたちは目的や意図をもって主体的に対話を求め、学習に取り組んでいる。意識調査の「友達に自分の考えや意見を伝えることができる」と答える児童が着実に増え、授業における自他の関係性の中で自己有用感が高まる取組に手応えを感じている。並行して学力調査等の結果も伸びてきた。現在、ICTの効果的利活用の実践的研究に舵を切った。デジタルによる学び合いの質・量の向上が大きな命題となる。

三 おわりに

中島みゆきの「糸」ではないが、「子どもが授業で輝く」方策(糸)はあまたあれど、個々の糸としてのみ存在するのではなく相乗的に織りなしてこそ機能する。布と成すコーディネートが大切である。取り上げた事例は小さな布づくりであるが、布を上質にするトライアルであると信じ、さらに学校教育全体に広げ、子どもが輝く教育につなげる歩みを続けたい。



頑張っています 生徒会

鹿屋東中(隅) 木原 正 博

本校は、鹿屋市の笠之原台地のやや東側に位置し、寿北小・寿小・笠野原小の全校区と東原小の一部から九百人を超える生徒が通う県内でも有数の大規模校です。昭和六十二年に鹿屋中学校から分離開校して本年度で創立三十五周年。開校当時は、広々とした山畑の中の閑静で自然に恵まれた環境にあったようですが、国道バイパス等の整備により市街地化が急速に進み、畑や水田が商業施設や住宅地へと変化してきています。

学校教育目標「向学の意気に燃え、心身ともに健康で、たくましく生き抜く生徒を育成する」、校訓「創造・敬愛・鍛錬」のもと、知・徳・体の調和のとれた文武両道の教育を目指しています。

本校は、JRC(青少年赤十字)加盟校で、「気が中心となって様々な活動を行っています。特に、本校の朝は賑やかで活気にあふれます。毎朝校門前では、全校生徒の輪番によるあいさつ運動や生活部による遅刻防止啓発が行われま

す。遅刻防止啓発では、遅刻したからといって注意したり、理由を聞いたりしません。係の生徒が「おはようございます」とあいさつをし、用紙を渡して、学級と氏名を書いてもらうだけです。遅刻には特別な理由があるかもしれないという想像力を働かせ、時間を守ることの大切さに気付いてほしいという思いを込めて用紙を渡します。百人近くいた遅刻者も、現在では数名にまで減少し、確実に成果を出しています。

その他にも、二週に一回、保健体育部の生徒が玄関前でポトルキャップ回収を呼びかけます。「協力をお願いします。」の掛け声の下に、次から次へとキャップが集まります。いくつかの部活動では、通学路に落ちた木の葉や玄関に入り込んだ砂を掃除します。地域の方からは、「中学校の周辺は本当にきれいだ。散歩していて気持ちがいい。」とお褒めの言葉もいただきます。

また、校則の見直しにも積極的です。昨年度は、学級活動や生徒総会等で制服の更衣期間の廃止と制服の自由選択制が話し合われました。

「制服の更衣は、気候や体調に合わせて、個人で判断すべきだ。」「服装の乱れにつながるか。」など、様々な意見が出されました。制服の自由選択制については、現生徒会長が性的マイノリティに配慮し、選挙でその実現を公約したことです。校長をどうやって説得しようかと、役員会で時間を掛けて議論したようです。いずれの提案も職員・生徒会で話し合い、本年四月から導入しました。特に制服の自由選択制については、その意義を全員が理解することが大切でしたので、三学期に職員、中学生はもちろん、小学校に依頼して、入学してくる六年生も人権学習を行いました。

本年度も五月の生徒総会で「履き物を揃える」という課題や、「靴下を白色以外も認めてほしい」という要望などが出されました。生徒会がどのように取り組んでいくのかを楽しみにしているところです。豊かな学校生活を自分たちの力で創り上げようとする彼らをこれからも職員全員でバックアップしていきます。

未来は自分の思い通りにならないこともありませんが、与えられるのを待つのではなく、自分たちで変えていく努力が必要です。課題に直面したときに、自らの頭で考え、他者と協働しながら、解決へと導いていく力を培うために、授業や学校行事、生徒会、部活動等、学校生活のあらゆる場面で、「褒められた、頑張った、成功した、誰かの役に立った」などの経験を重ね、主体性を高める教育を推進していきます。



新採一年目の春 自分軸を成すひとこと

錦江台小(市) 尾塚 浩明

大学を卒業し、いきなり二年生の担任として教壇に立つことになった春。もちろん初任研などない時代で毎日が待ったなし。とにかく無我夢中で努力し続ける日々だった。

ある日、新学期の疲れが癒せる大型連休の前に、PTA主催の教職員歓迎会が行われた。

お決まりの挨拶なども終わり、徐々に席も自由に移動するようになった頃、私の隣に四十歳ぐらいの男性が腰を下ろした。

「初めまして、私は〇〇といひます。いつも息子がお世話になっていひます。」

声を掛けてきたのは、担任する児童の父親だった。少し内気で大人しい息子が心配なことや最近算数の習い事を始め頑張っていることな

どの話を伺いながら、わが子に対する深い愛情がひしひしと感じられた。改めて大事な子どもたちを預かっていることへの重責と、子どもたちの背景となる保護者の存在や思いまで意識した瞬間だった。

そんな〇〇さんが、ふと

「先生の教育に対する信念は何ですか。」と尋ねてきた。

「まだ教職に就いたばかりなので固まっています。大事にしていることはあるのですが、これから変わるかもしれませんので。」

すると、一瞬表情を曇らせた〇〇さんが

「そいじゃ困る。先生が今正しいと思つていひる信念で子どもたちを教育して欲しいやい。」

そう言うのと再び微笑み、焼酎を注いでくれた時の顔が今でも忘れられない。

この出来事を境に、まだ新採だから、経験が少ないからなどという甘えた考えは許されないのだという覚悟が新米教師の心に深く刻み付けられた。

それから三十五年、現在校長としてコロナウイルス感染症や業務改善など難しい学校経営に悩む今でもふと思ひ出すこの言葉が精神的な柱となつていひる。

これからも知見を広げ、様々な情報収集をしながら、今自分が正しいと思ひう方向に自信と信念をもつて舵を取りたい。

心訓

求名小(北) 河内 恵里子

一、世の中で一番楽しく立派な事は、一生涯を貫く仕事を持つ事です。

一、世の中で一番みじめな事は、人間として教養のない事です。

一、世の中で一番さびしい事は、する仕事のない事です。

一、世の中で一番みにくい事は、他人の生活をうらやむ事です。

一、世の中で一番尊い事は、人の為に奉仕して決して恩にきせない事です。

一、世の中で一番美しい事は、全ての物に愛情を持つ事です。

一、世の中で一番悲しい事は、うそをつく事です。

実家の床の間の横の壁に、額入りの福澤諭吉の言葉とされる「心訓」が飾られていた。狭い家だったので、客間でもあるその部屋で寝ていた私の目に、毎朝一番に飛び込んでくる言葉であった。読もうと思つて読んでいひる訳でもないのに、いつも気が付いたら読んでいた。

いつ頃から読み始めたのか覚えていひないが、高校進学で家を出るまでの間、何千回と読んだ。しっかりと意味を読み解く訳でもなく、ただ目読した。そして、それは、今でも父の姿とともに

私の中にある。

父は、傷痍軍人である。戦争で利き腕の右手を失った。しかし、いつも自他に厳しく、凜とした態度で、達筆な文字を書いた。何よりもまがったことが大嫌いで、「適当」や「程々」のない世界にいた。自分のことより他人のことを心配したり気遣ったりする人であった。

この「心訓」は、父の口から放たれる事はなかったが、父は、これを生き方の糧とし、自分の姿で私たち姉妹を育てたのだ。だから、私はこの「心訓」を父の姿とともに思い出す。

教職生活も残り少なくなつた今、自分の半生を振り返る。父の教えに恥ずかしくない人生を送れてきたかなあ……と。

教職に就いて、多くの方と出会い、いろいろな出来事があった。様々な生活環境や、一人一人違う価値観にも触れた。困難な案件に挫折しそうにもなつたし、人間関係に悩む日もあった。でも、ここまでこられたのは、私の教職人生の基盤としても、この「心訓」があったからだと思ふ。

「人の一生は重荷を負て 遠き道をゆくが如し」

谷山北中(市)原 崎 竜 一

現在、NHK大河ドラマで渋沢栄一の生涯を描いた「青天を衝け」が放映されています。毎週、テレビ放映を楽しみにしているのですが、江戸幕府を開いた初代將軍徳川家康(演・北小路欣也)がナビゲーターとして登場します。私にとつて徳川家康は最も興味・関心のある歴史上の人物の一人です。その家康が残したと伝わっている言葉の中に次のようなものがあります。

人の一生は重荷を負て遠き道をゆくが如し
いそぐべからず
不自由を常とおもへば不足なし
ここに望みおこらば困窮したる時を
思ひ出すべし

堪忍は無事長久の基
いかりは敵とおもへ
勝事ばかり知りてまくる事しらざれば
害その身にいたる
おのれを責めて人をせむるな
及ばざるは過たるよりまされり

(※静岡市久能山東照宮『東照公御遺訓』参照)
家康は、激動の戦国時代を見事に生き抜き、関ヶ原の戦いを経て、征夷大將軍となります。そして、江戸幕府は約二百六十年以上続くことになります。

家康が残したと伝わっている言葉の中には、現代の私たちの生き方にも通じるものがあるように私は思うのです。何事も根気強く最後までやり遂げることに、強い意志を持ち続けること、失敗を恐れず挑戦すること、自分自身を見つめ

直すこと、など。

様々な教育課題や問題に直面し、解を探り解決を図る、適切に判断し決断を行うなど、学校経営実践の道のりは遠きものと痛感することもしばしばあります。

しかしながら、私たちは前に進まなければなりません。まさに、「人の一生は重荷を負て遠き道をゆくが如し」家康が現代の私たちに語りかけているように思ふのです。

「土台をしっかりと作ること」

垂水高 亀 田 誠

今から三十年以上前、新採教員として地方の高校に赴任し、ふとしたことからある方の自宅の離れを借りることになった。家主さんは当時五十過ぎの大工さんで、中学卒業後大阪で修行し、地元に戻り仕事をされている人であった。子どもさんはすでに自立していたこともあり、奥様とともに私のことを気に掛け、何かとよく面倒を見てくださった。この家主さんの家には夕方になると毎日のようにいろいろな人が遊びに来た。その度に私にも声が掛かり、そこで話題となる専門分野の仕事の話などは興味が尽き

ないものであった。

ある夜、家主さんが、「家作りの仕事は先生の仕事と同じところがあるが何だと思うか」と問うた。とっさには答えられずにいると、「家づくりでまず大切なのは土台となる基礎をしつかり作る事。これができなければいい家はできない。人も同じだ。挨拶や言葉遣いなどの基本がしつかりしていないと、その後伸びないのではないかな。勉強ばかりでなく、挨拶や言葉遣いなどがしつかりできる生徒を育てていかないとね。」と語られた。心の底に深く染み込んだ。

人間関係を円滑にするには、コミュニケーション能力が必要不可欠であるが、コミュニケーションは双方方向のものであり、相手の気持ちもこちらに向けてもらわなければならない。その手始めとなるツールが挨拶や言葉遣いだと考える。家主さんのこの話があつてから、自らもさらに意識して挨拶を実践するとともに、基本的な生活習慣を身に付けることの大切さを生徒たちにも少々厳しすぎるほど伝えてきたように思う。ありがたいことにその大切さを理解し、実践できるようになってくれた多くの教え子たちは、現在でも社会の様々なポジションで活躍し続けてくれている。

残念ながらこの家主さんとは、もうお話しすることができなくなってしまったが、「あの時教えていただいたことは、これからも大切にしながら教員を続けていきます。」と伝えたい。

ある日の校長講話



新しい学校に込められた願い

山川小(南) 東郷 克利



新しい山川小学校が誕生して約半月が過ぎました。新しい学校での生活はどうでしょうか。スクールバスで学校に来る人たちはもう慣れましたか。今日は、「山川小」での初めての全校集会となるので、学校のことを二つ紹介し、そこから大切なことに気付いてもらいたいと考えています。

一つ目は、学校の名前についてです。新しい学校の名前はなぜ「山川小」となったかです。山川地域には四つの学校がありました。全て閉校してなくなってしまうでしたね。新しくできる学校だけが山川地域の唯一の小学校となる

ため、「やまがわ」には、これからの未来を担う皆さんに故郷「山川」への愛着を忘れず、誇りを持って生きていってほしいという願いと四つの学校の歴史と伝統を受け継ぎ、地域からも慕われ愛される学校になってもらいたいとの願いが込められています。

二つ目は、学校のマーク、校章についてです。これは山川小学校の校章です。全体の形は旧大成小、山川という文字は旧利永小、文字を囲んでいる桜のマークは旧徳光小、全体を囲んでいる鶴のマークは旧山川小といった具合に、それぞれの校章を参考にして作られました。山川小の校章は、閉校した四つの学校のマークが合わさってできています。ここにいる皆さんと一緒にですね。では、このマークにはどんな願いが込められていると思いますか・・・。「山川から世界へ羽ばたく」、「みんなが協力し合う」、「閉校した学校のことを忘れない」だと思っています。さすがは高学年、いいことに気付いてくれましたね。他には、みんなが仲良く楽しく学校生活ができるようにとの願いも込められています。山川の四つの学校が集まってできた山川小学校を、まず私たちが愛し大切にしていきたいように。学校を愛し大切にしていくなためには、お互

いを思いやり仲良くしていくことです。皆さんの頑張りを期待しています。

お金の話

志布志小(隅) 北原利郎

今日は、お金について不思議なことや稼ぎ方、使い方についてお話をします。

例えば、一本のジュースがあります。自身は同じ品物ですが、スーパー、コンビニ、自動販売機で売られている値段は、それぞれ違います。どうして、同じ品物なのに値段が違うのでしょうか。みなさんは考えてみたことはありませんか。また、みなさんが使う、郵便はがきの値段は今六十三円です。前の東京オリンピックがかった五十年ほど前は、一枚五円でした。

およそ五十年の間に十倍以上も値段が上がっています。どうしてこんなに高くなったのでしょうか。

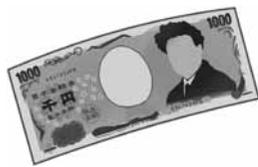
逆に三十年前パソコンは、一台五十万円以上

もする品物でした。しかし、今では五万円ほど買うことができます。

お金は大切な物です。お金を稼ぐためには一生懸命に働かなくてはなりません。自分の好きな仕事でお金を稼げるととてもうれしいものです。しかし、同じお金を稼いでも、お金を使う時期やその使い方によってお金の価値は大きく変わります。

校長先生が今月紹介する「十歳から知っておきたいお金の心得(出版えほんの杜)」という本の中では、自分のお金を社会をよくするためや自分の好きな会社を応援するために使う方法が書かれています。

これからの時代は、現金を使わないお金の使い方が増えていきます。「お金」って何かな? 「お金を上手に使うにはどうしたらいいかな?」ということをこの本はアドバイスしてくれると思います。図書室に置きますので興味のある人は読んでみてお金のことについて考えてみてください。



げんきで なかよく がんばる子

鹿屋養護 榎本 博

(語先後礼で)

皆さん、おはようございます。
すっかり挨拶ができましたね。

(イラストや写真をスライドで示しながら)
みなさんは、鹿屋養護学校の校訓をおぼえていますか。では、一緒に言ってみましょう。「げんきで」「なかよく」「がんばる子」

今日は、「げんき」について話をします。

元気であるためには、手洗いやうがい、マスクを着けることが大切です。そして、好き嫌いをしないでしっかり食事を摂ること、しっかり寝ること、そして運動をすることも大切です。

ほかに、「げんき」には自分の命を大切にするとという意味もあります。この写真を見てください。傘を差して歩いている人がたくさんいますね。今は梅雨という、雨がたくさん降る季節です。雨がたくさん降ると、この写真のように道路が通れなくなるなど、大きな災害が起こることもあって、とても危険です。そこで、中

学部や高等部の皆さんは、天気予報を見て、明日の天気を調べて準備する習慣を身に付けてほしいと思います。

学校の中でも、梅雨の時期に気を付けなければならぬことがあります。雨が降ると、廊下が滑りやすくなります。廊下を走ると危ないのが気を付けましょう。それから、昼休みには外で遊ぶことができないので、プレイルームがとでも混雑します。友達とぶつかってけがをしないように気を付けてください。

校長先生からのお願いです。けがをしないように気を付けながら、元気で楽しく過ごしてくださいね。

これで校長先生の話が終わります。では、しっかりと挨拶をしましょう。(礼)



話のひろば

情報化社会を 生きていくために

八幡小(北)

田中 真佐利

私がパソコンを使い始めたのは、教職に就いてからのことだ。初任校で先輩の先生や恩

師から「これからはパソコンの時代だ。パソコンの研修を積んで力量を高めるように頑張りなさい。」と何度も勧められた。その頃の私は、ワープロでテスト問題や家庭学習の課題、ワークシート等を作成し、表計算ソフトで成績処理等を行っていた。パソコンに興味はあったものの、当時は大変高価なために購入を躊躇していた。しかし「これからはパソコンの時代だ。」という言葉に背中を押され、大枚をはたいてパソコンを購入した。使い始めた頃は、キーボードの配置すらよく分からなかった。研修のために購入したパソコンであるが、現在パソコンは

教職員にとって必要不可欠なものとなった。初任の頃の先輩の助言には、今でも感謝の気持ちでいっぱいである。

さて、平成から令和の時代に移り、世の中の動きも大きく変わってきた。教育現場も同様であり、中でも「GIGAスクール構想」により、一人一台のタブレット端末が整備された。このタブレット端末を鉛筆やノートと同じく文房具のように使い、新たな学びを実現させなくてはならない。新たな課題が我々教師に課せられたのだ。この課題解決のために、本校では情報教育担当の職員の計画の下、「ICTリテラシー」を高める努力をしている。五月には「Zoom」の使い方を学んだ。多少ではあるが「Zoom」を使ったやり取りもできるようになってきた。また、「Teams」についても学んだ。まだマニュアルを参考にしながらではあるが、リモート会議に参加して、使い方を理解することができた。今後、校内研修では「ロイロノート」の使い方を学ぶ予定である。子どもたちが日常的に「ロイロノート」を活用できるように研修を深めていくつもりだ。

時代の変化が著しく、日々進歩を続ける情報化社会であるが、私自身が後れを取らないよう

に「ICTリテラシー」を高め、子どもたちの健やかな成長に寄与できるよう、校長として努めていきたい。

もう一つの出船

飯山中(南)

川畑 映一郎

二校目の学校は飯島の里中学校。専門教科外の複数

の授業。経験のない部活動や校務分掌などに不安を抱えながら、新しい勤務が始まった。特に離島では地域や保

護者との信頼関係づくりを一番大切にしながら、い、という先輩の言葉をかみしめながら、若さを武器に、そして、がむしゃらに頑張った。いや、前に進むしかなかった。

生徒は、一つでも多くのことを吸収しようと目を輝かせ、私の言動を純粹に受け止めた。そのような中で、勤務できる喜びをひしひしと感じるようになってきた。島内・村内行事やPTA活動に率先して参加することが、同じ地域に住む一人として認められ、それが大きな自信につながったと強く思う。

保護者の子どもに対する思いは特に大きい。島内には高校がなく、中学校卒業と同時に、我

が子が島から出ていくという現実と、親としての覚悟を様々な場面で見えた。子どもにはたくましさや優しさを求め、一人で生活する厳しさを、小さな頃から地域ぐるみで教える愛情を感じた。卒業式後は「出船の会」を各家庭で盛大に催す。不安や期待、寂しさが混じった家族の顔と学校では見せない凛とした主人公の顔を見ることができた。教師としても、また地域に住む一人としても、この島を出て行く生徒の出船に関われたという感激が込み上げたと同時に、教育の原点はここにあると実感した。

五年経ち、紙テープの束を持たされた私は里港にいた。フェリーが動くと同時に、生徒たちを乗せた漁船が何艘も後ろからついてくる。涙が止まらない。いつまでも後をついてくる。しばらくして漁船が里港に引き返していく。最後の別れである。私にとってのもう一つの出船だった。上着のポケットに手を入れると、ある生徒からもらった手紙があった。

「先生、きびなご漁のビデオ、最高でした。網をあげるお父さん、一番かつこよかった。初めて見て感動した。また必ず島に遊びに来てください。」

辛いときや仕事があまくいかない時、そのビ

デオを今でも時々観ている。

母校に帰る

金久中(大)

窪田 智司

真潮輝く 南溟の奄美の島に雲晴れてあ、大空に 天がけ

る 若き生命の 夢はらむ 白亜の円き殿堂は その名もゆかし われら金久中学校

令和三年四月六日、入学式で四十年ぶりに口ずさんだ校歌である。

当時の面影がほとんどない金久中学校であるが、校歌を聴くと当時の事が鮮明に思い出された。正門をくぐると正面にはプールがあり、右手には技術室、左手には四階建ての校舎、そして小さな道路を渡り、校歌にも歌われている「白亜の円き殿堂」と称される二つの円形校舎。お世話になった先生方や友人まで。まさか、母校に校長として帰ってこようとは・・・

当時は、学校の創立した背景など考えることなく、何気なく過ごした中学校生活、今回の異動がよい機会だと思い、歴史をひもといいてみる

ことにした。

奄美群島が日本に復帰して二年後の昭和三十年九月一日に名瀬中学校から分離独立し、現在の地に新築落成した円形校舎に一年生三〇七人と平一雄初代校長、職員十一人で開校した。開校当時、校歌や校旗もなく、狭い敷地内で、先輩方は、鍬やスコップ、そうめん箱等を使って砂利を集め、校庭拡張、プール作りに頑張った。先輩方の熱い思いと涙の結晶が、今日まで脈々と受け継がれてきた本校の歴史と伝統である。その象徴となるものが「自主創造」「研学鍛錬」「親和協力」の校訓であり、濃緑の松葉が天かける姿をかたどった校章と校旗である。そして平成二十三年三月に解体された金久中学校健児の学びの拠点であり、歴史と伝統を育んできた円形校舎である。

現在、正門正面に建つ円形校舎を模したB棟が当時の円形の建物を引き継いで建てられたことを知り、私たちはその形だけでなくその中に込められた「金久魂」を子どもたちに引き継がなければならぬと強く実感した。

生涯、母校を「心の故郷」として愛し、本校の一員であるという自覚と誇りを持ち、心豊かに生き抜いていく子どもを育てていきたい。

読書案内



■有田 和正 著

教え上手

旭小(旦)村岡 由一

再配二校目で御指導いただいた教頭先生が、私を社会科の道へと導いてくださった。そして、小学校社会科の授業実践を研究する者で、知らぬ人のいない憧れの存在が有田和正先生であった。若かりし頃、有田先生の本を買ってきては、むさぼるように読んだものである。

鹿児島市小学校社会科教育研究会の末席にも加えていただき、有田先生の飛び込み授業を参観する機会があった。有田先生と初めて出会ったはずの子どもたちなのに、有田先生の軽妙な語り口と面白い教材に、いつの間にかのめり込んでいく姿に私も大変興奮した。懇親会では先

生のすぐそばでお話を伺うことができ、穏やかな温かい人間性にも触れることができた。有田先生は、二〇一四年にお亡くなりになられたが、残された言葉や理論は今も全く色あせていない。有田先生と言えば、「追究の鬼」とか「はてな?帳」、「子どもの側に立った教材開発」などのワードが浮かぶ。私も触発されて、『寒い地方に住む人々のくらし』の単元を研究授業しなければならなかった時に、妻を拝み倒して北海道根室地方に取材旅行に行ったことが、今ではよい思い出の一つとなっている。

『教え上手』とは分かりやすく、そして教わる人に学びたいと思わせる『技術』を持ち、かつ、彼らを思いやるような心とユーモアを備えた『人間性』を持つ人のことを指すのです。』と述べておられる。実に奥深い言葉である。また、「学校でも会社でも、人を育てようとするとき、私たちはつい過剰に教えてしまうものです。たくさん教えるほど人は育つ。そう思っています。たくさん教えるほど人は育つ。そう思っています。しかし、教えることは恐い行為で、何もかも教えようとすると、かえって浅く少なくなしか伝わらないものです。』

新規採用者を含め、職員になかなか私の指導が浸透しなかったのは、これが原因だったのかと大いに反省しているところである。

サンマーク出版 一五〇〇円＋税

トヨタの会議は30分

山田小(始) 岩 澤 和 徳

学校や教職員を取り巻く社会情勢及び環境が急激に変化する中で、教職員の職務に係る時間的・精神的負担が、これまで比べて増大している。そこで業務改善の必要性が生じているが、学校の実態に応じて試行錯誤の実践を繰り返している中、この本に出会った。本書は、民間企業の実態と当会社の骨太なコミュニケーションを図る取組を知ることができるビジネス書である。

学校と企業では職務内容が違うので、本書に述べてあることがそのまま参考になるとはもちろん言えない。しかし、民間企業の利益を上げることが前提になる仕事と児童の健全育成のための仕事の性質は同じと感じた。

まず、タイトルにもなっている「会議は三十分」は、従前の長時間にわたる議論を良い会議ととらえるのではなく、会議で何を話し合うのか具体的な課題を共有しておき、付度をなくして前向きな意見を出し合い、意思決定をすることを良しとされる。PDCAサイクルを習慣化・仕組み化することで、無駄なく、短時間で会議

を行うことを実現している。

この本は構成が分かりやすく、ポイントがまとめられているので読みやすい。また、物事を簡潔に伝えること、効率のよい会議の方法、プレゼンや上司への報告などの仕事効率化、良好な人間関係を築くコミュニケーション術などが書かれている。

その中で、「会議や打合せ中にメモを取る行為は、人対人のコミュニケーションとして不自然」というフレーズは気になった。人の話を聞くときにはメモを取る行為が暗黙のルールになっているが、メモを取ることに終始してしまい、気がつくと話半分で聞いてしまったということもよくあることだ。メモを取ったことに満足してしまうだけでなく、メモしたものを見直すこともなければ、メモの在り方を考えた方がよい。全くメモを取らないことはできないが、最小限にメモを取りながら、話し手の表情を見ながら話に集中して聞くことを心掛けようと思う。



すばる舎 一三〇〇円

日本語を味わう名詩入門20 心に届く言葉を探して

住吉小(熊) 今 屋 厚 造

小学校の教科書でも有名な「まど・みちお」さんの詩集です。もしかしたら、多くの小学校の図書室に関連図書として紹介されているかも知れません。六月の「あじさい読書旬間」の際、多くの子どもたちが賑わう図書室で、何気に手に取った一冊でした。いくつかの詩とその解説に目を通していううちに、「何を読んでいるの？」と一年生から声をかけられるまで自分の世界に入り込んでしまいました。

詩の中で扱われている素材は、小学生にも身近なものばかりですが、哲学的な主題が隠されているように感じました。その中の一つを紹介します。読み手によっては、深く考えさせられる言葉が綴られています。小学生は小学生なりの自分の日常と重ねて、大人は大人としての経験や立場に応じた感じ方があるようです。

もうすんだとすれば

もうすんだとすれば これからなんだ／あんな
らくなことが 苦しいんだ／暗いからこそ 明
るいんだ／(中略)／生まれていくのは 死ん
でいくのだ／なんでもないことが 大変なこと
なのだ

この詩には、対応する二つの視点のどちらにも
も価値があり、同じ意味があることに気付かさ
れます。私たちは校長として、様々な意見を聞
きながら両面の価値を熟慮した上で判断せざる
を得ない立場にあります。たとえ一つの判断を
下した後も、自分の中にもう一つの価値も大事
にしたいという思いを残しながら、悩み続けて
しまうことがあります。そんなときに、どのよ
うに自分の中で落とし込むか。納得して次へ進
むか。自らを問い直し、その矛盾を受け入れる
ための視点と考えを与えてくれる作品だと思
いました。

その他にも多くの作品には、大小の様々な視
点からの物事の見方が感性豊かな言葉で綴られ
ています。その場面がすぐにイメージできたり、
はっと考えさせられたりする巧みな言葉は、読
み手の心を明るくしたり、楽しませたりする効
果があるようです。

私自身、多くの言葉を使って難しく伝えるよ

り、短く分かりやすく、相手の心に届く言葉で
伝えられたらと日々悩んでいる今日この頃で
す。

あすなる書房 一五〇〇円

■瀧本哲史 著

ミライの授業

名柄小(大) 迫 田 尚 久

この本は、十四歳の中学生に向けた特別講義
形式になっています。中学生向けと言っても、
京都大学の学生向けの講義と同じテーマになっ
ていて、小学生から大人まで楽しめる内容です。

もし、子どもたちが「どうして勉強が必要なの。」と質問してきたら、みなさんはどう答えますか。本書では、「魔法」等、子どもが興味を引くような言葉を用いて説明しており、その内容にも感心させられます。

講義のタイトルは「未来をつくる五つの法則」です。

法則一 世界を変える旅は「違和感」から始

まる。

法則二 冒険には「地図」が必要だ。

法則三 一行の「ルール」が世界を変える。

法則四 すべての冒険には「影の主役」がいる。

法則五 ミライは「逆風」の向こうにある。

この五つの法則を説明していく中で、十九人の偉人が紹介されています。名前は知っていても、よく知らなかった「偉人たちがどのように世界を変えていったのか」が、よくまとめられています。

例えば、ナイチンゲールは、多くの兵士を救い、不衛生な環境に暮らす人々を救い、イギリスはもとより世界の医療・福祉を大きく変えていったのは、看護師としてではなく、統計学者としての功績が大きいそうです。

また、哲学者ベーコンの、人間を惑わす四つの「思い込み」や「観察と実験」の大切さは、これからの時代をたくましく生き抜くために必要な知識であると思います。

巻末には、この講義の参考文献が説明付きで紹介されており、興味を持った内容は掘り下げて学ぶことができます。学校だより等のネタとして活用できると思います。至る所にキラリと光る言葉が詰まった本でした。

講談社 一五〇〇円

「温泉に入りたいなあ。」

疲れていると、ついつい口からこんな言葉が出てきませんか。私は、温泉が大好きです。教頭時代、人事異動の面談の時、校長先生から、「どの地区に行きたいですか。」と聞かれました。私は、すかさず、

「温泉のある地区ならどこでもいいです。」

と即答しました。その結果、伊佐市に転勤したことがあります。

伊佐市は、素晴らしい温泉地です。校区には、菱刈鉦山から湧いてくる黄金の温泉があります。しかも、破格の値段、ワンコイン百円でした。仕事で、「疲れた。」「うわあ、どうしよう。」など、落ち込んだときは、温泉に入るとすうっと気持ちになり、明日も頑張ろうという気持ちになりました。

また、隣の校区に行くと、つるつる美肌になる温泉もありました。シャワーはなく、湯船からお湯をとり、髪を洗ったり体を洗ったりしないといけない、古びた温泉でした。毎日、通っていると、お風呂仲間もでき、たまに用事で行けないでいると、

「あら、どうした？忙しかった？」と、声をかけてもらえるようになりました。そのうち、着替えの籠の中には、きゅうりやらゴーヤやら季節の野菜が入るようになりました。夕方の会議は、時間が気になって仕方ありませんでした。午後八時。温泉へゴー！温泉の女将さんが、

「先生、時間過ぎてもいいからゆっくり入って。」

慌てなくてもいいからね。」

と、優しい一言も。

「はあ極楽。極楽。」

頭にタオルをのせ、足を伸ばして、一日の反省。

「まあどうにかなる。明日は明日の風が吹く。」

など、一人で笑いながら入ることもしばしば。

給料日には、「つるつる美肌 美人の湯」のちよっと高い温泉まで入りに行きました。美人の湯というだけあって、体を洗ってもいつまでもつるつるしていました。ここに、毎日入っていたら、私は、鹿児島の楊貴妃と呼ばれていたと思います。

週末には、ちよっと足を伸ばして人吉温泉にも行ってみました。ここには、日本でも珍しいリグナイト泉がありました。天然ラドン、植物性ミネラル、還元系・アンチエイジングと三つの特徴を持ち、温泉に入れば「美肌（若返り）の湯」、飲めば「健康増進」になるといふ温泉です。温泉の色は、錆びついた色ではありませんが、ゆっくりに入った後は、いつまでもポカポカしていました。ここで、汲んできた水で炊いたご飯は、とてもおいしく何杯でもいけそうでした。

温泉の一番よいところは、泉質によりませんが、美人になり若返ってくることです。特に、五十歳以上の方に有効だそうです。そのためには、体を洗うのは、入浴してからにする。それは、不要な角質や毛穴の汚れをとりやすくするためです。次に、体は手で洗うことです。タオル等でゴシゴシ洗うと、肌を傷めてしまうことがあるからです。そして、一番大切な洗顔は、浴槽からではなく、新鮮な湯口の温泉を桶にとり、そこにタオルを浸し軽く絞って蒸しタオルのように顔にかぶせることです。じんわり肌がやわらかくなったら、そっと優しく洗います。すると、卵のようなつるつる美人になります。仕上げは、やはり同じく新鮮なお湯を湯口から取り、肩からかけることです。最後に、十分以内に保湿剤を塗っておしまいです。私は、ずっとこのようにしてきたので、温泉美人になりました。皆さんも、どうですか？

趣味・文芸

「あなたも温泉に入りませんか」

大丸小(南) 山口 美帆子

また、霧島は、どこもかしこも温泉があり、出張終わりの温泉は最高でした。霧島の温泉は、硫黄泉や塩類泉、鉄泉などとても種類が豊富です。源泉掛け流しのため、湯船に入ると、ザワーッと流れ出てしまいます。これも、ちよっとした贅沢でしょうか。霧島の温泉は、坂本龍馬が療養のために訪れた温泉だけあって、肌に優しい温泉から切り傷などにもよいお湯があります。目が疲れたら、温泉の原液をタオル等に浸し、それを、目に当てると温熱効果ですっきりします。パソコンとにらめっこした後は、これをするととてもよく、目がぱっちり開いたよくな気がします。



校区の未来発展に向けて

指宿小(南) 鬼塚 富貴子

本校区は、松尾城跡に示されるように、古くは平安・鎌倉時代から指宿郡の政治や治安をとりしきる地頭の所在地として発展した校区である。

本校は、明治三年に「正明館」として鹿児島県で五番目の学校として創立され、指宿市内では、一番歴史のある学校である。また、学校の名称は、市町村の統廃合等により変更が繰り返され、昭和二十九年に指宿市立指宿小学校として制定され現在に至っている。

平成二年十一月十日の創立百二十周年記念式典では、盛大な催しを行い、学校・家庭・地域が一体となって喜びが沸きあがったことが記念誌に記載されている。

当時の校長は、「歴史は一直線で結ばれている。この一直線を伸ばし続けるこれからの子どもたちに、現在の大人として譲り、教えることはたくさんある。」と記している。当時の校長の思いを未来へのメッセージと捉え、現校長

として、今を大切に校区の宝である子どもたちの健全な育成に尽力することが歴史の一直線上に繋がると考えた。

令和二年十一月十日、指宿小創立百五十周年記念事業を四部構成で開催した。

一部は、国内外で活躍中の本校の卒業生によるオペラ記念リサイタルだった。児童は、初めて聞くオペラの迫力に目を輝かせながら聞いていた。また、講師の演出も素晴らしく、小学校時のエピソードを取り入れたり、アニメを上手く取り入れたりするなど、子どもへの粋な計らいが見えた。後輩に対する深い愛情に感謝の気持ちでいっぱいになった。

二部は、記念式典を行い、本校の誕生日を祝った。参加児童は、四年生以上に限定し、本校歴史の節目に同席させた。市長・教育長等、来賓の言葉に頷く児童の姿に出席者から賞賛の声を頂いた。未来の指宿校区を託せる子どもたちであると嬉しくなった。

三部は、記念講演会で人生訓を学ぶことができた。講師は、校区在住の住職だった。住職もまた、本校卒業生であり、全国的に活躍されていた。講演の内容は、校区の歴史や人とのつながりについての内容であり、未来を担う子どもたちや大人の私たちに、時々、自身を振り返ることの大切さを気付かせていただいた。さらに、講師自身のもつ雰囲気や声量、言葉の間の取り方など、学ぶことが多く、貴重な時間になった。四部は、正門前の記念碑の除幕式だった。除

幕式は、関係者で行ったが、午後からは、学年毎に実行委員長を中心に写真撮影を行った。撮影は、プロの写真家に依頼した。

後日、創立百五十周年記念事業全ての写真を校長室前に掲示した。壁一面には、学校・家庭・地域の生き生きとした姿がしっかりと刻まれている。校区の宝物がまた一つ増えた。

本年度、創立百五十一年目を迎えた。本校には、豊かな自然と五感を育成する環境が整っている。通称「四つの森」「なかよし川」「ドリームマウンテン」と呼ばれている。

四つの森とは、「ふれあいの森・いこいの森・観察の森・読書の森」である。交流や学びの場として長年活用されている。また、地下水を引き、手作りした「なかよし川」には、鯉やエビなどの生き物が住んでいる。児童は毎日、鯉に餌をあげたり、エビやカエルの成長を見守ったりして命の尊さを学んでいる。さらに、平成二十六年度には、児童の体力向上のために保護者による「ドリームマウンテン」が設置された。おかげ様で小さな登山体験ができるようになった。

最後に、本校の校訓は「正しく」「やさしく」「つよく」である。本校の歴史と伝統、先人から受け継がれている様々な思いは、子どもたちの成長する姿で還元していきたい。将来の本校区の発展は、子どもたちに託したい。今後も、学校・家庭・地域で組織的に子どもたちの教育に取り組んでいきたい。

*** こころの詩 ***

西瓜の詩

農家のまひるは

ひつそりと

西瓜のるすばんだ

大かい奴がごろんと一つ

座敷のまんなかまにころがつてゐる

おい、泥棒がへえるぞ

わたしが西瓜だつたら

どうして噴出さずにゐられたらう

山村暮鳥

一般財団法人校長会館だより

【お知らせ】

昨年度はコロナ禍のため中止となりました教育講演会を本年度は次のように計画しています。

- 期日 令和三年十二月十二日(日) 午後
- 会場 鹿児島県医師会館
- 講師 現在のところ未定
- その他 一般の方対象
入場無料

季節の言葉 「残暑」

今人のやどりにのこる暑さかな 藍村

立秋を過ぎた後の暑さ。例年、八月いっぱいくらいは暑い日がつづく。いったん涼しくなった後で、暑さがぶり返すこともある。類似の季語に「秋暑」というものもあるが、秋暑と聞くと、どこか弱さというか、儂さのようなものを帯びた、「秋らしい暑さ」を連想する。

編集集

後記



平成十年、総合教育センターでの長期研修の機会をいただきました。その頃はまた、半分くらいはワープロで、もちろん私もその一人です。最初の計画発表会に向けてワープロだった人たちがパソコンを使ったプレゼンテーションでの発表にとりかかると、断固ワープロ、OHPでの発表にこだわったのは私ともう一人だけでした(新しいことに挑戦する勇気が持てなかったというのが正直なところです)。発表終了後、「懐かしいなあ。新鮮だった。」とおっしゃったセンターの先生方の言葉は今でも忘れられません。結局、パソコンを購入し、研修仲間に使い方を教わり、最後の研究発表はパソコンで行えるまでになりました。あの時、研修に行っていなければ今ほど使いこなせていなかったと思うと感謝の念でいっぱいです。

あれから二十年余り経ち、またもや私にとってはあの時の気持ちを思い起こさせる体験をすることになろうとは予想もしませんでした。オンラインでの研修会です。オロオロする私に優しく教えてくれる職員のおかげで、ようやく繋がった時の感動。いくつになっても「初めて」があり「できた」時はうれしいものだと思えて感じる体験でした。きつと学びに向かう子どもたちも同じ気持ちに違いありません。時代やツールは変わっても子どもたちに多くの「分かった」「できた」を味わわせたいものです。

最後になりましたが、今月も御多用の中、玉稿をお寄せいただきました皆様に心からお礼申し上げます。

有村 真由美 (草牟田小学校)